

第48回

『栄冠は君に輝く』に 作詞者がこめた想い

「夏の甲子園」、高校野球のテレビ観戦も、大会歌が流れる閉会式とともに終了しました。今から70年前の昭和23年、学制改革に伴い大会の正式名称が変更されるのを機会に、新たな大会歌のための歌詞が募集されました。

石川県在住の中村義雄氏が婚約者だった道子さんの名を借りて応募し見事当選。『栄冠は君に輝く』の誕生です。作者は当時33歳、すでに演劇の脚本を書くなど文筆業に携わっていたことから名を秘しての応募でした。

大正3年生生まれの作者は野球少年だった16歳のとき野球の試合中に右脚つま先を怪我、骨髄炎により膝から下を切断、大好きな野球をあきらめ、文芸の道へ。当時の球界は、中等野球や学生野球全盛の頃で、早慶戦では水原茂・三原脩が花形スターの時代でした。

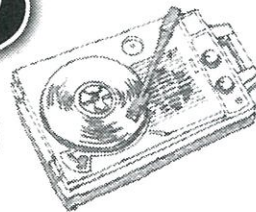
大会歌制定から20年後の昭和43年、第50回記念大会を機に作者は真相を明かし、本名を「加賀大介」に改名

以後、作詞者表記は「加賀大介」になりましたが、戦後間もない時期に作られたこの歌からは、作者の熱い

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



想いと深い教養が伝わってきます。

題名にある「栄冠」や「希望」といった非物体を擬人化して脇役に置き、肉体の躍動だけでなく、まなじりや臉という言葉で本来の主役である球児たちを印象つけています。

「雲、光、天、風、大地、空」という歌詞からは「地水火風空」、仏教でいう万物生成の五大元素をもとに背景を設定するなど、もしかしたら舞台用の台本や書き割りを頭に描きながら言葉をついでいったのかもしれない。

また、応援歌には見慣れない「美しく匂える健康」の歌詞には、自らの夢を若者に託す心情すら感じられ、終戦から3年後という時代、野球ができる喜び、それは「健康な体」と「平和な時代」の両方があったこそ得られるもの、という作者の声なき声が聞こえて来ます。

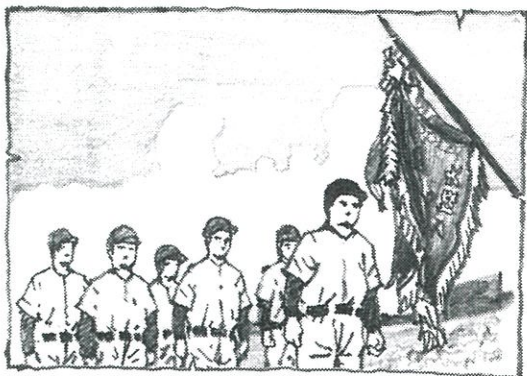
優勝した学校に授与される深紅の大優勝旗には「勝者に棕櫚の葉を」という意味の文字がラテン語で記されています。聖書や歴史書にも登場する棕櫚の葉

は「栄光」を象徴し、それをかざす

ことで榮譽を讃えたという故事に基づき「緑濃き棕櫚の葉かぎす」を歌詞に入れたのか、それとも優勝旗にある「棕櫚」の文字の存在を知って書いて書いたのか――。

そして「栄冠は君に輝く」の「君」とは、単なる「あなた」ではなく、複数形の「あなたたち」であって、新時代にふさわしい「YOU」を提示することで、この歌を若人すべてに贈る青春讃歌にしたかったのだ、と私は考えています。

作品から感じられる説得力の強さは、作者自身、野球のできることで当たり前ではなかったことを知る当事者だったからでしょう。



この歌に古関裕而が最上のメロディを提供し、同じ福島出身の人気歌手・伊藤久男の歌唱で大反響を呼ぶことになりました。発表から70年、色褪せることなく輝くこの不滅の名曲に、私は棕櫚の葉を捧げたく思います。